

目的 我國の高齡化社会への急速な移行は、國民の住生活面にも大きな影響を与えつつある。とりわけ既婚子と老親の好ましい居住方式への提言は、従来にもまして緊急性を持った重要な研究課題となりつつある。本研究は、近い将来結婚し老親との同居の可能性を有する立場にある若い女性の同居意識を考察したものである。彼女達の老親との同居観を整理することによって、高齡化社会における好ましい住生活を實現するための計画課題を探ろうとするものである。

方法 阪神間の私立女子短大生(1,2回生)300名を対象とするアンケート調査を実施した。アンケートは直接配票・直接回収方式を用いた。(調査実施時期は昭和57年6月~7月)

結果 (1)調査対象の属性;調査対象者の平均家族人数は4.5人である。現在3世代同居をしている層は約3割であるが、過去の経験を含めると同居体験層は約半数に達する。(2)老人問題の認知度;日本人の平均寿命に対する認知度をみると、諸外国に比べ「やや長寿」と受け取めている層が約7割に達し、我國の長寿化特性の理解はやや浅いとみられる。また社会の高齡化問題と自己との関わりについても、「身近なこと」と感じている層と「無関係」・「無関心」と感じている層とが2分しており、彼女達の捉え方には切実感の薄い層も多いことがわかる。老人問題の3大要因と言われている「貧困」、「病弱」、「孤独」については、彼女達も比較的的確に認識しているとみられる。ただ、3大要因の中では高齡者の経済的貧困に対する理解が相対的には低く、むしろ老人が孤独で寂しい存在であることへの関心の方が高い点が特徴的傾向として指摘できる。